

横光利一『夜の靴』に内在する『欧洲紀行』の「痕跡」について

位 田 将 司

一 はじめに

横光利一が「アジア・太平洋戦争」の末期に疎開した、その疎開先である「農村」をモデルとして描いた『夜の靴』（鎌倉文庫、一九四七・一一）と、横光のヨーロッパ外遊を主題とした『欧洲紀行』（創元社、一九三七・四）の二つの作品に共通する、テクストの「形式」に注目すると、次のようなことがわかる。それは、この二つのテクストに共通する「形式」が「日記体」だということである。

横光はヨーロッパ外遊の前年に、「純粹小説論」（『改造』一九三五・四）のなかで、「紀行文」や「日記」といった「日記体」のテクスト形式を「純文学」と規定している。「純粹小説論」における「純文学」とは、横光の定義によれば、「自然主義文学」としての「私小説」となる。「自己身の事実」、あるいは「事実の報告」の「リアリティ」に重きを置いたテクストこそ、横光のいう「純文学」である。そして横光は、そのような「リアリティ」を持った「純文学」という文学ジャンルが、「日記体」のテクスト形式と、構造的な繋がりを保持していると考えていたのだ。と

いうことは、横光自身が「日記体」のテクストを構成する場合も、横光が「日記体」と「純文学」に見て取った構造的な繋がりを考えなくてはならなくなるだろう。

つまり横光が「純粹小説論」において、「日記体」のテクストを「純文学」としての「自然主義文学」や「私小説」の文学ジャンルとして定義づけたその時、横光自身が構成した「日記体」のテクストもまた、この「純粹小説論」の「純文学」の定義によって再帰的に解釈されてしまうのだ。横光が「日記体」のテクスト形式で創作する時、横光は必然的に「純文学」と理論的に繋がりのあるテクストを創作していることになる。

このような観点から『夜の靴』と『欧洲紀行』のテクスト形式を比較すると、二つのテクストは「日記体」という形式で、単に似ているというだけの関係ではなくなる。『夜の靴』と『欧洲紀行』は「日記体」の形式において、横光が定義した「純文学」という文学ジャンルの形式を共通して保持している、ということになるのだ。つまり二つのテクストは、「純文学」の形式を保持するテクストとして比較され得る。

以上のように本論では、横光が「純粹小説論」で理論的に基礎

づけた、「純文学」の定義によって、横光のテクストを再帰的に解釈する。この解釈によって約十年間の時差が開く二つのテクストの間に、構造的な連関を読み取ることができるようになるだろう。そしてここでは、その連関が『夜の靴』に内在する、『欧洲紀行』の「痕跡」として見出すことができる。この「痕跡」は、単にこれら二つのテクストを並べただけでは現れない、再帰的な解釈によって現れる構造上の存在といえる。

これまで『夜の靴』と『欧洲紀行』の間に広がる十年の時差は、これら二つのテクストを比較することを困難にしてきた。だが、二つのテクストに共通する形式を考察することで、『夜の靴』のテクストに、『欧洲紀行』が抱えていたテクストの構造上の問題を、同じように見つけることができる。これは『夜の靴』のなかに、『欧洲紀行』の「痕跡」が刻み込まれており、それを解釈によって見出すということなのだ。この十年の時差を越えて引き継がれている「痕跡」をめぐり、これら二つのテクストを、「純粋小説論」を媒介とすることで連関させて読解する。そこには、これまで論じられなかった、二つのテクストの相同性と差異を見出すことができるはずである。

二 『欧洲紀行』と「穴」という「痕跡」

横光はヨーロッパを外遊し、『欧洲紀行』として発表する前年に、「純粋小説論」で、自らの文学理論を構築しようとする。この評論のなかで横光は「純文学」の定義をおこなっている。その定義

で横光は、「近代小説の生成といふものは、その昔、物語を書かうとした意志と、日記を書きつけようとした意志とが、別々に成長して来」ていると指摘するのである。つまり横光によれば、日本の「近代小説」は、二つの「意志」によって構築された歴史を持つている。しかも、この二つの「意志」は対立関係にあるというのだ。

「物語を書かうとした意志」が「通俗小説」を形成し、「日記を書きつけようとした意志」が「純文学」を形成した。この二つの「意志」は対立関係にあり、この対立関係こそが、「近代小説」の歴史そのものを構成している。そして、最終的にこの対立を止揚し、統合することができる文学ジャンルが、横光によって登場させられる。それが「純粋小説」であり、その「純粋小説」を実現する人称が「四人称」だと「純粋小説論」では主張されるのである。

以上のような「純粋小説論」で主張された「近代小説」の歴史から見れば、『欧洲紀行』も『夜の靴』も、共に「純文学」と規定される。しかし、このような規定は「純文学とは何か」という、日本近代文学全体を射程に収めるような、概念的な問いから導き出されたものではない。何も日本近代文学の歴史の内部では、「日記体」のテクストは、すべて「純文学」と見做されなければならない、というような普遍的な「純文学概念」を主張しているわけではないのである。

そうではなく、横光が「近代小説」の歴史に読み取った「意志」

から、この規定は導き出されるのだ。つまり、少なくとも『欧洲紀行』と『夜の靴』が「日記体」である以上、横光は自らのテクストのなかにも「純文学」の「意志」を読み取らねばならないということである。では、横光の「純粹小説論」に従って、「純文学」として『欧洲紀行』や『夜の靴』を解釈すると、何が解明されるのだろうか。

『欧洲紀行』のテクスト形式では、一日の出来事が記される文章の冒頭には、日付が記されている。例えば「二月二十四日」の日付が記される部分では、「出発。疲れてゐるので、上海のことは後日に廻し日記は香港から書かうと思ふ。」とあり、横光は明らかに「日記」としてテクストを形式化しようとする。これに対して黒田大河は、横光の船中から家族に宛てた手紙にある「原稿」という言葉に注目し、「この「原稿」という意識に注目したい。つまり、当時書きつつあった『欧洲紀行』は作者の素顔を書き記すのではなく、「原稿」として対象化したものだと言えるのである」と指摘する。¹⁾

つまり『欧洲紀行』は、単純な意味での横光の「日記」ではなく、「原稿」として構成されたフィクションの構造を持つと、黒田は指摘するのだ。その指摘は正しいのだが、しかしここで問題なのは『欧洲紀行』が「日記体」のテクストということである。例えば、「原稿」と意識することのない日常的な意味の日記であっても、日記とは生の「事実」そのものの描写ではない。そこに日記の「筋」が存在する限り、単なる日記もまたフィクションを当

然含むのだ。故にここで検討すべきなのは、『欧洲紀行』が横光の生の「事実」を記録した日記なのかどうかではなく、「日記体」のテクストゆえに構造上抱える「形式」の問題性である。

『欧洲紀行』を「日記体」の「純文学」として解釈する時、そこには構造的な一つの特徴を認めることができる。その特徴とは、『欧洲紀行』に登場する横光の「俳句」に現れている。横光は『欧洲紀行』のなかで、外国での句作が困難であることを次のように告白する。

五月廿二日／パリにゐると俳句は作る気にならぬ。隙き間もなく押し重なつて来る考へに、ぼけてしまふ。パリーぼけといふ言葉がこの地の日本人間にあるが、ぼけずにここにゐるには金の音に眼を醒す度胸があるのだ。／（中略）／ここでは句にはならぬ。以上は巴里着即後の私の句であるが、外国で俳句を作るには発明のために句を殺さねばならぬ困難さがある。／印度洋で、高浜虚子氏は、／印度洋月は東に日は西に／といふ句をつくられたが、この句ほど下手な句はないにも拘らずこの幼稚な平凡さに落ち込んだ所に、名手であれば落ち込み難い、外国といふ越ゆべからざる穴がある。／小説もこの通りだと思ふ。本格といふものは型から型を通り、自分を極度に殺し、押しつけ、突き抜け、大通俗に達したときを云ふので、この修行なくして本格はないと思ふ。／純粹さのみをかき集め、高度の純粹さに達することは一種の低級さだ。（傍線引用者、以下同）

横光は「パリ」にゐると俳句は作る気にならぬ」といい、「印度洋で、高浜虚子氏は、印度洋月は東に日は西にといふ句をつくられたが、この句ほど下手な句はない」と虚子に言及する。そして句作ができないことと、虚子の句が「下手」になるのは、「外国といふ越ゆべからざる穴がある」ことが原因だと主張するのである。この時横光は、虚子の「下手な句」をあえて「通俗」として評価し、「大通俗に達したときを云ふので、この修行なくして本格はないと思ふ。純粹さのみをかき集め、高度の純粹さに達することは一種の低級さだ」と記述している。

言葉遣いを見ても明らかのように、ここでは「純文学」と「通俗小説」の融合を主張した、「純粋小説論」が意識されている。そして高浜虚子の「客観写生」を旨とする俳句から、「穴」を見出していることにも注目したい。虚子は「日常の事やがて詩になる、即ち触目の事悉く俳句だ」というように、「俳句」もまた、日常性における「客観」のリアリズムであると主張する²⁾。虚子の俳句理論は横光のいう「日記体」という「純文学」が、「日常性」をありのままに表現する「事実の報告」のリアリズムとしていたことと重なる。それ故、『歐洲紀行』の日記の文末に必ずといっていいほど「俳句」が添えられるのは、単なる偶然ではない。つまり『歐洲紀行』という「純文学」のリアリズムと、「俳句」のリアリズムには理論的親和性があるのである。

この親和性から考えると、『歐洲紀行』の「日記」という「純文学」のリアリズムの形式、および、虚子のいう「客観写生」の

「俳句」のリアリズムには表象の限界点ともいえる、「外国といふ越ゆべからざる穴」が開いていると考えられる。この「穴」は単純な意味での比喩というよりも、テクストの構造的な「穴」と解釈できる。横光は、「純文学」のテクストが決して描写できないような限界、テクストが構造上抱えてしまう表象の限界を、「外国Ⅱ穴」として認識していたというべきである。

横光の「俳句」は二月二十四日の上海に到着の日記より始まり、以後ほぼ毎日詠まれていく。横光は船上で虚子主催の句会にも参加しているのだ。しかし、奇妙なことに横光が地中海に入るやいなや、三月二十五日以降（五月二十二日・七月二日はヨーロッパ到着以前の句が紹介される）、「俳句」は詠まれなくなってしまった。「俳句」のリアリズムは、ヨーロッパ（外国）という「穴」に消失してしまうのだ。この「俳句」の消失は、かなり極端な形で現れている。横光が水原秋桜子と帰国後におこなった「対談記」（『俳句研究』一九三六・二二）で秋桜子が、「パリにいらつしやつてから俳句はお作りになりませんでしたね」と指摘しているところからもわかる。まさしく地中海以降の『歐洲紀行』には、「俳句」の不在という「穴」が開いてしまうのだ。

さらにこの「穴」は、「俳句」以外の対象にも及んでいく。横光はヨーロッパから日本への帰りの列車で「ヂイド」に出会う。しかし、横光は決して「ヂイド」に接触することはない。横光にとって「世界第一の精神界の偉人」を代表する「ヂイド」を、一つの「風景」として眺めるのみである。横光は決して「ヂイド」

と直接接触しようとはしないのだ。

しかしこれは意識的に接触を避けたというよりはむしろ、接触できないと解釈すべきであろう。つまり『欧洲紀行』という「純文学」のリアリズムが、横光に対して「デイド」を「風景」として傍観させてしまうのである。いわば「デイド」もまた「外国」（ヨーロッパ）と同様、『欧洲紀行』というテキストでは代表Ⅱ表象できない「穴」として、触れ得なくなるといえる。ヨーロッパ外遊の前、若手の文学者たちは横光に対して、日本の「代表者」という過大ともいえる期待をかけていた。³『欧洲紀行』とは、そのように横光が日本を代表Ⅱ表象するテキストであり、それは「日記体」という「純文学」の形式で構成されたのである。だからこそ、そこには「純文学」というリアリズムに構造的に存在してしまう、代表Ⅱ表象をのがれる「穴」が開いてしまっていたのだ。⁴

ここまで『欧洲紀行』が構造的に抱えるリアリズムの限界点を、「純文学」や「俳句」の側面から考察してきた。この「穴」というテキストの限界は、横光個人の文学観や資質に帰すべきものではない。むしろテキストの形式こそが、横光にこのような代表Ⅱ表象の限界を強いているのだ。とすれば、「日記体」を「純文学」と見做し、「事実の報告」という自然主義的なリアリズムに規定した横光は、『夜の靴』という「日記体」のテキストにも、『欧洲紀行』のテキストと同じ構造上の問題を抱え込むはずである。

三 『夜の靴』における「日記化Ⅱ時間化」

『夜の靴』は「日記体」の体裁をとっており、「一日」を表わしている文章の冒頭は、例えば八月ならば、「八月——日」と記される。ただし、「月」は明記されるが、「日」の詳細は「——」として記されておらず、フィクションとして解釈の余地は残されている。『夜の靴』の冒頭は次のように始まり、日にちは伏せられているが、テキストの内容から「八月十五日」ということが判明する。

八月——日／駈けて来る足駄の音が庭石に躓いて一度よろけた。すると、柿の木の下へ蹶れた義弟が真っ赤な顔で、「休戦休戦。」といふ。借り物らしい足駄でまたそこで躓いた。躓きながら、「ポツダム宣言全部承認。」といふ。

このように『夜の靴』は敗戦を境に書かれ始めた、という形式をとるテキストである。もちろんいうまでもなく、このテキストもまた横光の「事実」の経験が作品となったわけではない。十重田裕一は、「鎌倉文庫刊行の『夜の靴』については、プランゲ文庫所蔵の二つの校正刷から、具体的な検閲の指示があったことが明らかとなる」と、『夜の靴』のテキスト自体が、GHQの検閲によって構成されていることを指摘している。⁵例えば「十一月」の日付をもつ日記の会話には、「何んだつて云へる時代」という言葉が存在する。しかし、「敗戦」によって到来した「言論の自由」自体が、逆説的には「検閲」によって構成されているのである。

このように『夜の靴』のテキストが表すのは、「日記体」だからといって、横光の「事実」の経験の記録ではなく、また「敗戦後」の無媒介に「何んだつて云へる」言語空間というものでもない。

従って本論では、『夜の靴』を単なる横光の日記として見るのではなく、日記として構成されたテキストとして捉える。つまり、『検閲』が『夜の靴』のテキストの一つの限界を縁取っているように、「日記体」というテキストの形式自体もまた、『夜の靴』のテキストの一つの限界を形作っているといえるのだ。では、その限界を画定するためにも、『夜の靴』がどのような形で「日記体」として「日記化」され成立したのかを、分析しなければならぬ。

『夜の靴』の「あとがき」には、『夜の靴』というテキストが「夏臘日記」(『思索』一九四六・七)、「木蠟日記」(『新潮』一九四六・七)、「秋の日」(『新潮』一九四六・二二)、「雨過日記」(『人間』一九四七・五)という四つの「日記」のアレンジメントであることが記されている。一方、『夜の靴』の本文のもとになっている横光自身が作成した草稿的取材メモが存在する。この草稿的取材メモは、暫定的に「夜の靴ノート」と名付けられている⁶。この「夜の靴ノート」と『夜の靴』とを比較するとテキストの構造的な差異が強調できる。

第一日目 ◎雨 いやいよ燠まない。／この雨では稲に打撃

だ。ここで一時間でも二時間でもさつと照らないと稲は実にならずまぼかりになる恐れある。困ったことだといふ憂色全

村に満ちてゐる。／今日の雨はここ特有のものではなく全国的の雨天で本ぶりの雨だ(二行アキ)／主婦、田螺を針でほぜくつてゐる／板の間の入口で明るみの方を向いて座り、亭主は朝から憂鬱に寝室に入つて寝てしまふ。山鳩のホ、ホー、ホ、ホーと鳴く声。／午後には雨に濡れた青紫色をいっぱい積み上げ、葉を巻いでゐる主婦 強い芳香があたりを漂つてゐて明窓から射すうす明かりに、葉は濡れ光つてゐる。／香に洗はれた薄暗の底で、紫色の青さは、雨滴を板の間に拡げてゆく夕暮れ。箆につもる紫色の実 重苦しい湿り。／

第二日目 ◎どこの農家も米がますますなくなつて来る。じやが芋と南瓜で喰ひつなぐ家が多くなる。こんなとき芋を売るやうな家は、米があるからだとすぐ分るので、芋も売らない。／去年の供出に際して、持つてゐるのに無いやうな顔をしたものの顔れてゆくのも今だ。／米がないといふことは、一種の誇りになつてゐるのだ。あるといふのは、どこか供出に際して狡い行為をしたものだといふことが、暗黙のうちに分る微妙さで、各自が米を借り歩く不平の貌。中には、米があるのに歩調を合せるための悩みもあれば、明らかにあることを知られてゐる家へ集まる恨みから、超然としがたい苦しさも、この雨の中を歩く顔の中には混つてゐる。／しかし、村の共同の精米所はどこにどれだけあるか覗んでゐる静かさで、ひつそりとして戸を閉めつつづけてゐる。／

第三日目 早朝の空を見上げ晴れの徴候があるときの主婦の歎声ひと声、

いつも黙つてゐる主婦のひと声。／「もやもやしてるのう、天気だ。」／夜中から暴風になるらしい気配だ。（後略）（引用中の二重囲みの日付は引用者が便宜上付与した）

以上のように「夜の靴ノート」では、日付は一切登場せず、セリテンスが羅列されているのみで、テクスト内の時系列は明らかにされていない。引用文には便宜的に二重囲みの日付を挿入し、『夜の靴』の本文との対応をわかりやすくした。「夜の靴ノート」の引用部分に対応する『夜の靴』のテクストは次の通りである。

第一日目

九月——日／雨やまない。この雨で稲は打撃だ。ここで一時間でも良いさと照らないと、稲は実にならず、茎ばかり肥る憂ひあり。困つたことだといふ憂色が全村に満ちてゐる。／主婦の清江は板の間の入口で、明るみの方を向いて座り、田螺を針でほぜくつてゐる。参右衛門は朝から憂鬱さうに寝室に入つて寝てしまふ。山鳩のホッホー、ホッホーと鳴く声に、牛がまた丁度、空襲のサイレンと同じ高まりで鳴きつづける。／午後——雨に濡れた青紫蘇をいっばいに積み上げた中で、清江はその葉を一枚つつむしりとる。芳香があたりに漂つてゐて、窓から射すうす明かりに葉は濡れ光つてゐる。紫蘇の青さが雨滴を板の間にしみ拡げてゆく夕暮、雨蛙が鳴き、笹につもつた紫蘇の実の重い湿りにあたりが洗はれ、匂

ひつつ夜になる。ホッホー、ホッホーと、山鳩のまだ鳴く雨だ。穏かでない、重苦しい夜の雨——

第二日目

九月——日／どこの農家もますます米が無くなつて来た様子だ。馬鈴薯と南瓜で食べつなぐ家が多くなる。こんなとき芋を売る家は、米があるからだとすぐ分る。去年の供出に際して、持つてゐるのに無い顔を装つたものの、露はれてゆくのも今だ。米が無いといふことは、一種の誇りになり變つて来てゐるのも今だ、各自の米を借り歩く不平貌に、ある物まで伏せて見せねばならぬ、急がはしげな歩調の悩みもある。明らかに有ることの分つてゐる家へ集まる恨みから、超然とはしがたい苦しさや、いや、たしかに自分の家だけは無いといふ堅苦しい表情など、それらが雨の中をさ迷ひ歩く暇の間も、村の共同精米所だけは、どこにどれだけあるか、無いかを睨んだ静けさで、ひっそりと戸を閉めつづけてゐる不気味さだ。

第三日目

九月——日／早朝の空を見上げ、雲間から晴れの徴候をみてとると、いつも黙つてゐる清江もひと声、／もやもやしてるのう。天気だ。」／と云ふ。しかし、それも間もなくかき曇つて来る。（後略）（引用中の二重囲みの日付は引用者が便

宜上付与した)

引用部を見てわかるように『夜の靴』では、日付が与えられることよって、「夜の靴ノート」では露わになつていなかった、「日記」の時間構造が露わにされている。『夜の靴』から遡行的に「夜の靴ノート」の引用部分と対照すると、「夜の靴ノート」の引用部は三日間の出来事だったことがわかる。しかし、実際に「夜の靴ノート」が三日間に分割できるかどうかは、「夜の靴ノート」を読解するだけでは確定させることができない。

なぜなら「夜の靴ノート」の本文は、時間を特定できるような日付はなく、スケッチ風の文章が羅列されるだけだからだ。一見「◎」の記号が日付区分と対応するかに見えるのだが、他の箇所ではそうでなく、引用部を見てもわかるように、「第三日目」には「◎」は存在しておらず、「第二日目」と「第三日目」の境界は曖昧である。また他の箇所では、「◎」が文意の強調に使用されていると推測される場所もあり、必ずしも法則性が発見されるわけではない。

これに対して『夜の靴』の本文は、日付が付与され、日記として時間系列が整理されている。そして、ここで「純粹小説論」の「定義」に戻らなければならないのである。横光の「純粹小説論」では、「純文学」が「必然性・日常性」の文学として規定されている。これは、物語に生起する出来事の系列が、時間的に整序されているということの意味する。つまり横光にとって「純文学」

とは、「夜の靴ノート」のように時系列が存在せず、「偶然」に出来事が羅列しているような構造ではなく、「日常」の出来事の因果関係が、時間的な「必然性」のもとで表現されているテキストなのである。テキストが時間的因果関係のもとで「必然」として表現されて始めて、「日常」が「事実のまま」に記述されることになるのだ。横光にとって「純文学」とは、「日常」を時間的に必然化して表現する文学ジャンルなのである。横光が「純文学」を「必然性」の文学と定義する時、「日記」の構造を持ちだすのはこのためなのだ。この意味でまさに『夜の靴』は、「偶然」の出来事が羅列される「夜の靴ノート」から、「必然化」時間化され、「日記化」されたテキストといえる。

では、『夜の靴』が『歐洲紀行』と同じ構造を持った、「日記体」の「純文学」の形式だとしたら、二つのテキストに共通する問題とは一体何なのだろうか。

四 『夜の靴』における「記憶の痕跡」と「歯車」の「廻転」

『夜の靴』の九月の日記には、「私は毎日、農村研究をしてゐるのだが、実は、私の目的はやはり人間研究をしてゐるのだ」とある。その「農村研究」、「人間研究」をおこなうためには、「私が働かないといふ弱点をもつて眺め暮し」、そして「比較的正しいさに近づく方法としてでも、傍観の徳といふことは有り得るのである」と、「私」の「傍観」的な立場を強調している。つまり、「私」が「傍観」の立場を占めて村人から距離を取ること、村人の行

動が客観的に観察できるといふのだ。しかしそのような傍観的態度は、「私」に負い目を植え付ける。「十月」の日記で「私」は次のようにいう。

ときどき我ながらいやな気持ちが起こつて来る。私が疎開者同様のくせにどこか疎開者らしくない気持ちの起ることだ。

事実、私はまだ東京の所帯主でここでは私の妻が所帯主になつてゐる。妻と子供が疎開者で私だけはさうでなく、研究心をもつて来てゐることが、一つの義務だと思ふある観想の仕わざのためだ。（中略）倦くまで研究心を失ひたくはないと思ふ虚剛と、人間らしからざる観察者の気持ちを伏せ折りたくもあつて、個人の中のこの政治は甚だ調和を失つて醜い。

傍線部を見ればわかるように、「私」は自分の疎開先での立ち位置を、否定的に捉えている。しかし「私」が「疎開者」ではありえず、「人間らしからざる観察者」であるのは、「私」の性格的内面に原因を帰することはできない。むしろ「日記体」というテクストの形式自体が、「私」の傍観的立ち位置を呼び込んでいると考えるべきなのだ。これは『欧洲紀行』で、横光が「ヂイド」を「風景」として傍観するしかなかつた問題と重なるのである。

そしてこのような「私」の傍観的立ち位置は、「戦争」の「敗け」そのものを見失わせる。『夜の靴』の八月十五日と推定される日記には、「敗けた。——いや見なければ分らない。しかし、何処を見るのだ。この村はむかしの古戦場の跡でそれだけだ」という記述があり、「私」は「村」のなかに、日本の「敗け」それ自体

を見出すことはできていない。ただ、「村」がかつての「古戦場」だった痕跡を見出すのみである。さらに、「日記体」のテクスト形式が呼び込む「私」の傍観的態度は、「八月」の日記で、以下のように疎開先を表象する。

この村の人たちも空襲の恐怖や戦火の惨状といふものについて、無感動といふよりも、全然知らない。このことに關して共通の想ひを忍ばせるスタンダードとなるべき一点がないといふことは、今は異国人も同様の際だつた。たしかに、知らせようにも方法のない村民たちと物をいふにも、も早や、どうでもいいことばかりの心の部分で、話さねばならぬ忍耐が必要だ。この判然と分れた心の距離、胸中はずきり引かれた境界線といふものは、こちらには分つてゐるだけで、向ふには分らない。人情、非人情といふやうな、人間的なものではなく、深い谷間のやうな、不通線だ。農民のみとは限らず、一般の人間の間に生じてゐるこの不通線は、焼けたもの、焼け残り、出征者や、居残り組、疎開者や受入れ家族、など幾多の間に生じてゐる無感動さの錯綜、重複、混乱が、ひん曲り、捻ぢあひ、噛みつきあつて、喚きちらしてゐるのが現在だ。

このように「村」や「村の人たち」に対して、「私」は、見通しのきかない「不通線」という痕跡としてしか認識できない。もちろんこれもまた『夜の靴』という「日記体」のテクスト形式が招き入れている問題である。

「村の人たち」が「異国人」のように「戦争」の「惨状」に対して「無感動」なのではない。『夜の靴』というテキスト形式自体が、「私」を「異国人」として「村の人たち」を傍観させているのだ。だからこそ、「村」と「村の人たち」は、「私」にとつて錯綜した見通しのきかない、「不通線」としてしか現れないといえるだろう。これは『歐洲紀行』で、横光にとつて「外国」が「穴」となってしまったことと、アナロジーの関係である。「不通線」とは『夜の靴』の「日記体」のテキスト形式が代表Ⅱ表象できない、まさに構造上の「穴」に相当する。『夜の靴』にも『歐洲紀行』同様、テキストの形式上、表象が不可能となった「不通線Ⅱ穴」が存在するのである。

そして「八月」最終日の日記で、「私」は、村内で生じている家族や友人たちとの対立を、「戦争」と同一視しながら、「敵愾心もなく、戦闘心もない、粹な鑑賞精神が、思はず弾と一緒に開いた響き」を感じ取っている。「私」がそうするように、村内の人間関係の対立と「アジア・太平洋戦争」とを無媒介に比較することとは、本来無意味である。だがそのような同一視は、「粹な鑑賞精神Ⅱ」を可能にする「日記体」のテキスト形式を通してのみ、可能なのではないだろうか。「日記体」のテキスト形式を通すことによつて、「私」は村内の対立と「戦争」とを同一の地平で眺める「観察者」の視点を占める。その結果、「私」は「村」のどこを探しても「敗け」を見つけないことはできず、「戦争」そのものも「村の人たち」の対立に還元してしまう。さらに、日本は戦争

に「敗け」たのではなく、日記の言葉を借りれば、「戦争は停止」していると表現されるに至るのだ。ここでは「敗け」を見出すことができないばかりか、否認されてもいるのである。

この「私」が、常に「戦争」と「敗け」とに出会い損ね続けるという問題性は、『夜の靴』の結末部で登場する日付にも現れる。その日付とは結末に現れる「十二月八日」である。そして、この日付が登場する意味は重要だといえる。何故なら『夜の靴』の冒頭は、「八月十五日」の「ポツダム宣言承認」で始まり、その結末は「十二月八日」という、日本とアメリカの「戦争」が本格的に開始される時間を表す日付だからである。つまり『夜の靴』の時系列は「敗戦」と「開戦」によつて循環しているのだ。そしてこの循環、なぜ可能なのかといえれば、まさしく『夜の靴』が「日記体」のテキストだからなのである。

草稿メモである「夜の靴ノート」では、出来事は偶然に羅列されているのみであった。その場合、出来事の連続性を認識させるような秩序が存在しないため、出来事の循環そのものが不可能となる。しかし、『夜の靴』の出来事は、時間の秩序に従つて必然化され、日付の秩序を与えられている。この循環はまさしく、「日記体Ⅱ純文学」のテキスト形式として「必然化Ⅱ時間化」されることで可能となっているのである。出来事が時間の秩序のなかで計量可能になって始めて、出来事は時間的連続性を獲得し、循環し反復するのだといえよう。例えば、カレンダーに記された記念日や祝日が毎年循環して反復して巡るのは、日付の「時間化」の

構造が備わっているからなのだ。

こう考えると、例えば八月の日記で「映写機」の比喩が現れるが、この比喩は「日記体＝純文学」のテキスト形式が抱え込む循環の構造を表現したものだと考えると、「映写機」が『夜の靴』に登場する必然性を説明することができる。

私は農村といふものを映す高速度の映写機を、一度ためしに使つてみたい。完全な廻転に用する歯車は完全な円形では駄目だといふ法則がある。高速度映写機もその学理を応用してある。AはBと相等しく、BはCと相等しい場合に、AはCと相等し、といふ数学上の定理が、今はさうではなく、AとCとは等しからず、といふ、新しい数法が生じて来たさうだ。これを半順序概念といふさうだが、他の何事よりもこれは大革命の端緒となるもの——としても、それはさて置き等しきものは何もないといふこの美しさ。おそろくどの農村も、農村の存するところすべてが異つてゐることだらうが、高速度機もかうなると必要だ。一疋の蚤も、半順序概念のAとして、この農村を計量する何ものか、私の円形ならざる歯車の一つにならば幸ひだ。

疎開先の「農村」を記録した「映写機」は、フィルムの一コマが時間として「計量」され「歯車」によって「廻転」させられることで、その風景を運動として再生する。フィルムはあたかも日記のように一コマ一コマが時間的に秩序化され、それが連続性を獲得することで、「農村」の運動を記録することができる

のである。そういう意味では、テキストの構造として『夜の靴』は、映画的な構造を持つテキストということもできるだろう。

ただし「映写機」のフィルムを「廻転」させる「歯車」の構造は、単純な循環構造なのではない。「私」が「半順序概念」と呼ぶように、「歯車」は、「完全な円形」を保つてはいないのである。この「映写機」の「円形ならざる」構造は非常に興味深い。なぜならば『夜の靴』が描いた日付の構造もまた「映写機」と同じく「円形ならざる」循環だからである。

『夜の靴』の日付は先に指摘したように、「敗戦」の「八月十五日」を起点として、その約四か月後の「十二月八日」という、アメリカとの「開戦」を象徴する日付で終わっている。日付だけを見れば、確かに「敗戦」と「開戦」が循環しているのであるが、ここに登場する「十二月八日」は一九四五年であつて、一九四一年ではない。つまり、『夜の靴』に現れる日付の循環も「映写機」の「歯車」同様に、「完全な円形」ではなく振れを内在しているのだ。ここに現れる「十二月八日」は、「敗戦後」の日付であつて、純粹な意味で「開戦」の日付ではないのである。

横光は「映写機」の「歯車」が抱え込む「円形ならざる」循環構造を、『夜の靴』の日付にも与えることで、あたかも「映写機」で撮影するように、疎開先の「農村」を描いたといえる。そこには「敗戦」から「開戦」へと逆戻りするような錯覚を与える、つまりは「敗け」を再び「開戦」によつて無効にしてくれるような、振れた時間秩序が導入されているのである。

横光は確かに、『夜の靴』を「映写機」の「歯車」の構造に似せることで、「農村を計量」し、「農村」の「すべてが異つてゐる」所をフィルムに焼き付けるように、一コマ一コマ詳細に描写することができたのだ。しかしその「歯車」の「円形ならざる」構造故に、ここでもまた「敗け」をとらえ損ねてしまっているのである。『夜の靴』に現れる開戦の日付は本来、一九四五年の「十二月八日」であつて、「十二月八日」という日付によって「敗け」を無効にすることはできない。しかし、その「一九四五年」を省略することで、まるで「完全な円形」のような時間的循環を演出し、「敗け」を隠蔽してしまつたのだといえるだろう。

『夜の靴』の「私」は「戦争」や「敗け」そのものを見出すことができない。それらは「私」の前で、「古戦場」、「不通線」、「銃貫創」という痕跡としては現れるが、「戦争」や「敗け」そのものにはつねに出会い損ねるのである。これは『欧洲紀行』が「外国」即ちヨーロッパを「穴」としてしか表象できず、「ゼイド」と出会い損ねてしまつた、「日記体＝純文学」のリアリズムの構造の問題として共通しているのだ。それ故『夜の靴』において、「私」は「古戦場」、「不通線」、「銃貫創」といった、痕跡の周りを循環することしかできないのである。つまり『夜の靴』という「日記体＝純文学」のテキスト形式では、「戦争」や「敗け」といった問題が、必然的に逃れ去つてしまふといえるだろう。

五 まとめ——『夜の靴』と『欧洲紀行』——

『夜の靴』の「十月」の日記には、次のような記述がある。

寝ながらあちこちで話す村人の会話を聞いてみると、この谷間だけかもしれないが、意味が分らぬからフランスの田舎にゐるやうで、私はうつとりと寢床の中で聴き惚れてゐる。

「私」は『欧洲紀行』の記憶を思い起こしている。さらに「十二月」には、『欧洲紀行』でおこなつたハンガリーの訪問が「ハンガリヤで一人の踊子、イレエネ」という形象をとつて現われるのである。『夜の靴』には、このようにテキスト形式だけでなく、物語内容でも『欧洲紀行』の痕跡を見ることができるとだ。

横光は『夜の靴』のなかで、『欧洲紀行』が描いた欧州体験を反復しているのである。その反復は心地よい感覚に変換され、『欧洲紀行』では「地獄」とまで呼んだフランスの言葉にさえも、「聴き惚れ」ている。⁸もちろんこのように『夜の靴』のなかに、『欧洲紀行』の「記憶の痕跡」が反復されるのは偶然ではない。確かに二つのテキストの間には十年もの時差が広がっている。しかし、『日記体＝純文学』という共通のテキスト形式が、二つのテキストを呼応させ、その「記憶の痕跡」を互いに反復させ続けているのである。『夜の靴』の日付が循環構造を持っていたように、『欧洲紀行』と『夜の靴』という二つのテキストもまた、「映写機」の「歯車」によって「廻転」させられて、互いが循環し反復する

構造を成しているのだ。

そしてこの反復には二つの側面が存在している。一つは、横光や「私」が対象と出会い損ねる瞬間そのものを、反復が表現しているという側面である。記憶は常にすでに欠落を構造的に内在させている。だからこそ、『欧洲紀行』における「外国といふ越ゆべからざる穴」や「チイド」、また『夜の靴』においては「古戦場」や「不通線」、「銃貫創」のように、横光や「私」は記憶の痕跡の周りを循環し反復するが、追い求める対象それ自体には決してたどり着かない。「八月十五日」以降に、「私」が「農村」に決して「戦争」や「敗け」を見出すことがないのは、まさにこの反復と循環の構造が『夜の靴』に内在しているからだ。

一方この反復には、別の側面も存在する。それは常に記憶を反復するが故に、記憶が持続するということである。反復によって記憶は欠落を内在させるのであるが、それと同時に記憶はその欠落を埋めるために、さらに反復し持続する。ただし注意すべきは、記憶の持続といってもそれが常に、「戦争」や「敗け」との出会い損ねを「享楽」する記憶だということだろう。これは横光や「私」が「敗け」というトラウマ（痕跡）を、反復と循環という「享楽」の構造によって、回避しているということをも意味する⁹⁾。この『欧洲紀行』と『夜の靴』に共通する「日記体＝純文学」のテキスト形式から、横光の戦争に対する応接の仕方を、批判的に考察することもできるのである。

横光の所謂「文学者の戦争責任」に言及する時、戦時中の横光

の発言や行動、そして書かれたテキストの内容、を即的に批判するだけではなく、「戦前」と「敗戦後」を貫通するテキストの構造（形式）も含めて分析すべきであろう。そうすることで「ポツダム宣言全部承認」を境に「戦前」と「敗戦後」を分割するような、恣意的な時間軸を疑うこともできるようになる。テキストの構造において横光は、『欧洲紀行』から『夜の靴』までの十年の時差を、「日記体＝純文学」という共通するテキスト形式で記録し（記憶し）、それを痕跡としてテキストに残していたのである。横光に文学者としての「戦争」への「責任」を見出す場合、それはフェティッシュとしての「敗戦」から考えるのではなく、少なくともこの十年の時差を含む二つのテキスト形式の連続性の分析から導かなければならないのではないだろうか。

「日記体＝純文学」のテキストで出来事を記録し記憶すること、「アジア・太平洋戦争」が「十二月八日」や「八月十五日」という日付に象徴させられてしまい、その日付の「前後」で分割できるように出来事と見なされるのも、日付による秩序化が原因なのである。つまり、「戦争」をこのような日付に象徴して理解するということ自体、「否認の構造」のなかで「戦争」を把握しているという証拠なのだ。この構造の中では、常に「戦争」は「否認」され、出会い損ねられてしまう。だからこそ、『欧洲紀行』と『夜の靴』のテキスト形式の呼応を分析することによって、この「否認の構造」を相対化させなければならぬのだ。そして、これら二つのテキスト形式の呼応を分析することによって、少なくとも

日付で「戦争」を象徴化し、分割することの恣意性を問いに付することは可能となったのである。

ここまで見てきたように、『欧洲紀行』と『夜の靴』を結びつける記憶の絆は、「痕跡」をめぐる反復と循環の構造によって固く結び付けられていることが判明した。『夜の靴』に内在する『欧洲紀行』の「記憶の痕跡」は、「日記体」純文学」のテクスト形式をめぐりながら、反復され、「戦前」と「敗戦後」の横光のテクストを呼応させ続けているのである。

注

- (1) 黒田大河「作品としての『欧洲紀行』——『旅愁』への助走——」(『日本近代文学』一九九三・五)
- (2) 高浜虚子「写生を説く種々の場合」(「写生といふこと」、『ホトトギス』一九二五・九)
- (3) 神谷忠孝「横光利一のヨーロッパ体験」(『近代文学の多様な性』所収、翰林書房、井上謙編、一九九八・一二)を参照。
- (4) 『欧洲紀行』という「純文学」のテクストに構造的に開いた「穴」と、「代表」表象」の失調の問題は、位田将司「『欧洲紀行』という「純文学」——「純粹小説論」と自意識をめぐる「穴」——」(『国文学研究』二〇〇六・三)で詳細に論じたので参照してほしい。本論の『欧洲紀行』と『夜の靴』におけるテクストの比較は、この「代表」表象」の失調をめぐる問題を出发点にして考察している。

(5) 十重田裕一「横光利一の著作に見るGHQ/SCAPの検閲——『旅愁』『夜の靴』『微笑』をめぐる——」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』二〇一一・三)

(6) 横光利一「夜の靴ノート」(『定本横光利一全集』第十一巻所収、河出書房新社、一九八二・五)

(7) 「十二月八日」の日記に、「私」が、村で知り合った「久左衛門」の「銃貫創の跡つけた彼の額」を眺める場面が存在する。この「銃貫創の跡」もまた「戦争」の「記憶の痕跡」である。

(8) ここではジャック・ラカンの精神分析を参照している。「地獄」という「リアルなもの」(現実界)は、反復されることで「否認」・「去勢」され、「象徴的なもの」(象徴界)の審級に書き込まれ、認識される。しかしこの象徴化をめぐる反復は常に失敗し、さらなる反復を欲望させる。この「地獄」を「否認」することで反復しようとする「私」の欲望こそ、まさに「享楽」の構造であり、「私」はここで「地獄」の記憶に「聴き惚れ」るのだ。ジークムント・フロイト「快原理の彼岸」(『フロイト全集19』所収、加藤敏、石田雄一、大宮勘一郎訳、岩波書店、二〇一〇・六)及びジャック・ラカン「部分欲動とその回路」(『精神分析の四基本概念』所収、ジャック・アラン・ミレール編、小出浩之、新宮一成、鈴木國文、小川豊昭訳、岩波書店、二〇〇〇・一二)を参照。

(9) 先に説明したように、「日記体」純文学」のテクスト形式が出来事を時系列化し、それによって記憶が循環・反復可能と

なった。そして日本の「アジア・太平洋戦争」における「敗戦」の記憶もまた、同じように時系列化されているのではないだろうか。「昭和二十年」や「八月十五日」といった日付によって戦争を理解することは、記憶の持続と反復に欠かせないものであるが、同時に『夜の靴』の「私」のように、「敗戦」のインパクトを回避させる構造でもあるのだ。「私」が「農村」において「敗戦」に決して出会えないことを「享楽」するのと同じように、日本の「アジア・太平洋戦争」における記憶は「敗戦」を否認し続けることで、記憶を持続させている。この「敗戦」を否認し「享楽」する構造は、白井聡『永続敗戦論』（太田出版、二〇一三・三）でいうところの、「敗戦」を否認し続けることで「戦後」の秩序を維持するという、「永続敗戦」の構造といえるのではないか。そして『欧洲紀行』と『夜の靴』のテキスト形式を比較することで興味深いのは、この「否認の構造」が横光の場合、「戦後」に始まったのではなく、少なくとも一九三七年の『欧洲紀行』のテキスト形式には既に覆蔵されているということである。

* 『欧洲紀行』の引用は創元社刊の単行本に、『夜の靴』の引用は鎌倉文庫刊の単行本に拠った。その他『定本横光利一全集』からの引用に際し、旧漢字を適宜新漢字に改め、ルビは省略した。

なお本稿は、早稲田大学国際日本文学・文化研究所（WJILC）

フランス国立東洋言語文化研究院（INALCO）共催・国際シンポジウム「記憶の痕跡」（於早稲田大学、二〇一二・一〇・一三）の研究発表に基づいており、科研費若手（B）[1920-30年代における「文学の価値化」と「価値哲学」の理論的関係の研究」（課題番号：25770095）の研究成果の一部である。会場をはじめ様々な機会でご意見を賜りました。皆様へ感謝いたします。